2011.1.5 朝 17面

取材ノートから

文化報道部　太田　敦子

# 幸せな最期
# 「在宅死」を選ぶためには

おおた・あつこ　1997年入社。北部総局、社会報道部、洛西総局を経て、昨年5月から暮らし面を担当。子育てや高齢者福祉、食などを取材する。

アパートで独り暮らしを続けながら末期がんと闘った男性が昨秋、85歳で亡くなった。「あと3カ月」と宣告された時から在宅療養を貫き、9カ月後に亡くなるまで、デイサービスと友だちの訪問を楽しみに穏やかに息を引き取った。在宅介護やホスピスなど社会環境が整う一方で、厚生労働省の人口動態統計（2009年）によると病院などの施設で亡くなる人は85%にのぼる。「最期まで自分の家で」という望みをかなえた男性の生き方に、積極的な「在宅死」を選ぶには何が必要か、あらためて考えさせられた。

向日市在住だった巣内静彦さん。料理が得意で、若い時は社員寮の調理場で腕をふるった。結婚はせず生涯独身。「競輪場で酔って転んで病院に運ばれてきたのが最初の出会い」。巣内さんを担当した「きょうと福祉倶楽部」（長岡京市）のケアマネジャーが振り返る。昨年1月の検査で末期の胆管細胞がんが判明した。痛みを抑えるためにも周囲が何度も入院を勧めたが、「家がいい」と譲らなかったという。

そんな巣内さんが利用したのは、介護保険と障害者自立支援法の訪問系サービス。1日3回の訪問介護や週3回のデイサービス、福祉用具貸与だ。医師の往診と訪問看護は医療扶助が適用された。

が、生活保護受給者のため、自己負担が必要な高価なサービスは利用できない。夜間の訪問介護なども受けていなかった。「朝には排せつ物で汚れている時もあり、決して清潔な環境とはいえなかった。ケアマネジャーが認める。「それでも入院中から『家に帰るんじゃ』と言い続けた彼の意思を尊重すべきだと思ったのです」。生前の巣内さんはデイサービスの職員にも語っていた。「今の生活でなーんも困ることはないんや」

何かあったら責任を問われるかもしれない―。そんな懸念から、重病を患う独居の高齢者を進んで担当する介護事業所や医師は少ない。遺族からの訴訟リスクもある。家族も「病院の方が安心」と思いがちだ。だが、周囲が連絡を密に取り、コミュニケーションを築いた上で迎えられた巣内さんの最期は、万全の環境ではなかったとはいえ、とても豊かだったのではないか。

Ⓛ巣内静彦さん
Ⓡ巣内さんが好きだったデイサービス。ベッドから起きられなくなるまで通い続けていた（12月22日、長岡京市の千春会デイサービスセンター）

デイサービス中の巣内さんに一度お会いした。ニコニコ笑ってソファに座っていた。タバコを請われれば気前よく分け、利用者仲間から「兄貴」と慕われていた。「人の中にこそ生きていた人だった」。スタッフが振り返る。

6畳間に小さな台所がついていた巣内さんの家。玄関は開けっ放しで、友だちが訪れてはベッドを囲んでいたという。ヘルパーは痛がるおなかを交代でさすった。

「おじは本当にいい顔をして亡くなりました」。遺骨を引き取っためいが語る。「一昨年夏に倒れた母は、病院で最期を迎えた。生きる屍（しかばね）みたいになってしまった母と比べて、どちらが幸せだったのか考えざるを得ません」

最期を自宅で迎えるためには経済的な余裕や整った環境が不可欠だと思っていた。だが、本人の意思を尊重し、「何があっても見守り続ける」という周囲の気持ちこそが一番大切なのかもしれない。